

明日 への 話題

リーマン前超え



三菱UFJモルガン・スタンレー証券
取締役社長 兼 最高経営責任者

とよいずみ としろう
豊泉 俊郎

今年も株式市況は順調と思う。軽減税率の撤廃に伴う売りというマイナス要因が今年はない。米国の景況は不悪であるし、日米での金融緩和の流れの差から円安傾向は続く。本邦企業の業績は為替の効果もあり相応の増益となろう。NISAによる新しいマネーの流入もプラス材料。年金からの購入もありうる。日本株の上昇により、世界全体の時価総額に占める日本株のシェアが上昇しており、ファンド等の組み入れ比率向上もありうる等々のプラス材料があるからである。更に言えば、米国、英国、ドイツといった国々では、既にリーマンショック前の2007年7月の株価を上回っている。リーマンショックに伴う金融面の傷が最も浅かった日本株がこれを超えていないのは不自然である。行き過ぎた円高と日本のデフレがアベノミクスで転換して来ている事を踏まえれば、リーマンショック前の2007年7月に18,261円であった日経平均株価を今年中に超えるとは自然で、20,000円も視野に入る。

ただし、金融業界に身を置く立場からすると、金融機関に対するグローバルベースでの規制環境は当時とは全く異なり、資本、流動性、市場リスク、コンプライアンス、事務・システムリスク、情報管理、顧客保護、ガバナンス、経営倫理等々における世界標準ベースでの一段の管理高度化が不可欠になっている。また、レバレッジ規制動向、ボルカールール等により業務運営形態の変化、収益体質の変化が起こる。投資家のROEに対する目線の向上も進む。更には、電子化の進展や通信技術の発展、提案型営業や高度なソリューション提供へのニーズの高まり、グローバル知見へのニーズの高まり等々、当時とは金融機関を取り巻く競争条件はおおきく変化している。但し、こうしたことは金融機関に限らないことで、各業界の企業も同様な変化への対応に直面していると思われる。

仕事柄、多くの経営陣の方とお会いするが、ビジネスモデルの高度化、選択と集中等に皆さん高い緊張感を持たれている。「会社の中に贅肉を残さず、生産性・収益性の低い事業、資産からの改善、離脱が即座に出来ない収益環境の悪い時は致命傷に成る。この変化を拒むのは社内の抵抗勢力である」と、話されたある社長さんのお言葉が印象深い。今月、節分を迎えた。今年の干支は「甲午」である。「甲」は「殻を破って頭を出した様子を象った文字」という。また、「午」には「突き当たる」という意味があるという。従って、「従来の物事が迎える成熟、衰退を乗り越え、将来の成長に向けた礎を築く年」と言えそうである。収益環境がまずまずと見られる時にこそ、古いビジネスモデルからの脱却、過去の成功体験からの離脱により、現在、そして近い将来に適したビジネスモデル、新事業への挑戦が求められる。スピードが肝心のようなのである。